柳生兵庫助

津本陽

3

柳生兵庫助 3

津本 陽

柳生兵庫助　三

定価　一一〇〇円

昭和六十一年六月二十日　第一刷
昭和六十一年十月三十日　第六刷

著者　津本　陽

編集人　川合多喜夫

発行人　吉沢孝治

発行所　毎日新聞社
東京都千代田区一ッ橋／大阪市北区堂島／北九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版
製本　大口製本

検印省略

Printed in Japan
ISBN4-620-10303-9

柳生兵庫助・目次（巻三）

転　5

山霞　99

獅子洞出　176

装幀　鴇田　幹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

柳生兵庫助

三

転

富田越後守重政は書院の窓際に端座していた。加児才蔵が酒の座での兵介との歓談をおえ、戻ってくるのを待っているのである。

一穂の火明りが、彼の魁偉な横顔を照らしている。四十一才の男盛りである越後は、漆黒の頭髪もつややかであった。

六尺二寸という、衆にぬきんでた体格にふさわしく、目鼻だちの彫りがふかく造作もおおきい。戦場に立てば敵を威圧する眼尻のきれあがった巨眼が、宙を睨んでいる。

膝もとの文机に、徳川秀忠指南役柳生又右衛門宗矩の書状が置かれていた。

「拙者甥、伊豫守長厳儀、富田流兵法の比類なき極意を一見のため、金沢までまかり越すべく候。よろしくおひきたての儀、御世話を頼みいり候」

越後が、嫡男重家と次男重康を兵介の迎えに出向かせ、みずからは留守といつわったのは、兵介がいかなる人物であるかを、会うまえにひそかに見さだめておきたかったからである。

越後は前田家では、主君一族と尾張荒子以来の譜代門閥のうちからえらばれた「七家」と呼ばれる最高の家格につぐ地位の、「人持組頭」であるため、かるがるしい行動はできない。

戦場では前田勢三ノ手、一万余の士卒をひきいる、師団長ともいうべき立場の将帥であった。

兵介主従が大徳寺関所に到着したとの知らせは、関所頭役青地六郎兵衛から、いちはやく金沢城に

とどけられていた。
兵介が幕府旗本で、秀忠の兵法指南役をつとめる柳生宗矩の甥であるというので、家中の重職はいろめきだった。
宗矩がただの兵法者ではなく、江戸柳営で重用され実力をつちかいつつある、家康の幕僚であったためである。
辣腕をもって鳴った幕府初代隠密頭、服部半蔵正成の死後、名跡を継いだ二代目半蔵は人望がうすく、伊賀同心の多くは彼よりも宗矩に接近したがっているという噂が、金沢にも聞えていた。
越後は主君利長に城中へ召された。
「柳生伊豫が参ったとか、妙なものが舞いこんできたものじゃ。間者かも知れぬのう」
利長はするどい眼差しをむけた。
越後は兵法をきわめた者として、兵介のひととなりを信じたい気持があった。
彼は首をかしげ思いまどいつつ利長にこたえた。
「それはいかようとも決めかねまするが。柳生伊豫と申さば、剣の高名は天下に知れわたりし剛の者にてござりますれば、細作をはたらくとも思えませぬ。しかし、うしろにきれ者の宗矩が糸をひいておれば、まったくうたがわしきふしはなしと、いいきれませぬ」
利長は猜疑のかげりをたたえた表情で、越後に告げた。
「この際じゃ、あやしきふしがわずかなりとも見受けられれば、斬りすてよ。仕物にしてもよし。他流試合に名をかりてもよし。裁量はそのほうに任せる」
越後は重荷をあずけられ、城中から退出した。
兵介が屋敷に到着し、門前に馬をつないで土間から廊下へみちびかれてきたとき、越後は土間をみ

おろす中二階の武者隠しの小部屋から、そのさまをぬすみ見ていた。
戸のはざまからみおろす兵介の動作は、まったく隙がなかった。重家に先導され、加児才蔵につきそわれてくる彼は、門口をはいるとき、腰の大刀を鞘とともに抜き、左手に持って左右をあらためてから足をふみだした。
大刀を腰から抜き家内にはいるのは、礼儀にかなう所作であるうえに、とっさに頭上から斬りかかられたとき、刀の柄でうけとめられる利点がある。
廊下へあがり、かどを曲るとき、兵介は身をうしろにのこし、足元をまえに出す慎重な構えになっていた。
越後はひとめで、兵介の腕前が尋常のものではないと察していた。おそらくは、名人の域に達しているにちがいない。
越後がそう思ったのは、兵介の全身から発する気圧を、感じとったからである。兵法鍛練のすえに、至極の境地に達した者のみが、わが身のまわりに余人をみだりにちかづけない、気圧の領域を保つことができるのである。
(これは立派な遣い手じゃ。かほどの達者がわざわざ当流を見にきたのであれば、尋常に応接したうえで、無事に帰してやりたいものだが)
越後は、兵介を一瞥しただけで好意を抱いた。
(京都か江戸で伊豫に会い、心ゆくまで剣について話しあい試合をしたかった。見るところ、兵法いちずの若武者じゃ。命をとらねばならぬほどの痴れ者ではあるまい)
さまざまに考えをめぐらせているとき、廊下に足音がして、才蔵がもどってきた。彼は酒のにおいをまきちらせつつ、越後のまえに坐った。

才蔵がまじめな顔になると、表情がひきつったようにこわばる。ほそい眼が異様なまでにかがやき、一瞥をうけた者は身のちぢむ思いをする。

べつに怒っているわけでもないのに、対座する者がいまにも刀を抜くのではないかとあやぶむほどの、狂暴なまでに凄みをおびた表情になる。

「越後殿、拙者見とどけて参った」

才蔵はあらたまった座では、口数がすくなくなる。

「どうじゃ」

富田越後は、才蔵の眼を正面から見すえた。

「さよう、柳生伊豫は勇をみがきし男でござる。拙者の目ききにあやまりはござらぬ」

言葉を数多く知らない才蔵にとって、勇をみがいた男というのは、武士に対する最高の褒め言葉であった。

「あいわかったぞ」

越後がうなずく。

「よろしくお引きまわしのほど、願わしゅうござる。なにとぞ、伊豫殿とお立ちあい下され。試合の場に主君を招くことはござるまい。この屋敷うちで、人ばらいをなしたるうえで、一個の器の水を他の器に移すがごとく、たがいの技を披露しおうて下され」

「さように計らおう」

越後の考えはきまった。

新陰流を代表する不出世の遣い手と、手のうちを見せあおうと、彼の気持は青年のようにはずんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幼少の頃から義父景政のもとできびしい鍛練を積み、名人の域に達している越後には、試合に勝とうとする気のはやりはなかった。
試合には、勝とうと負けようと、納得できればよい。相手の技がおのれの技よりすぐれておれば、負けるのは当然の帰結であった。
一度負ければ、ふたたび負けない剣をつくってゆけばよい。ただ、納得できない敗北は、みずからに許すことができない。それは、心の動揺が原因であるためであった。
相手に勝とうとすれば、気持に濁りがあらわれ、とっさの判断が狂う。太刀打ちは、あくまでも相手の動きを見て、攻防の拍子を的確につかんでのものでなければ、効果がない。
相手に打たれず、さきに打とうとどれだけ早業をくりだしてみても、理にかなった一撃には叶うことはなかった。
「拙者の願いをお聞きとどけ下され、かたじけのうござった。されば、これにてご無礼つかまつる」
座を立とうとする才蔵に、越後に声をかけた。
「お主、二、三日はここに逗留いたせ。そのうちには儂が伊豫殿と試合をいたそうほどに」
あくる朝、富田越後は兵介と対面し、午の刻（正午）を過ぎるまで話しあった。
兵介は初見の越後と言葉をかわすうち、旧知のような親しみを覚えた。年長で経験の数をもつんだ越後と、隔意なく兵法談議ができるのである。
越後は剣のつかいように話が及ぶと、眼をかがやかせ、身をのりだしてくる。たがいに相手の苦労ばなしの味わいが、よく理解できるため、つい熱が入ってしまう。
「伊豫殿には、肥後加藤にて実高三千石の侍大将として随身なされしに、わずかひと月ほどのちには辞去なされたと聞くが、それはなにゆえでござろうか」

越後の問いに、兵介は内心を率直に告げた。
「新参若輩の身にて大禄を頂戴いたし、加藤家宗徒の衆への遠慮などもございましたが、私が主仕えは叶いがたしと思いきわめたのは、キリシタン勢の退治におもむいたときでござった。百姓一揆勢を女子供にいたるまで、一村切り払いをいたさねば役がつとまらず、さような所業をなせば、兵法者にはふさわしからず、気構えがにぶりまする。それゆえに、思いきって牢人となったのでございまいた」
越後は、兵介の述懐に胸をうたれた。
「なるほど、みあげたお心掛けじゃ。兵法者が冴えわたる境地を保たんがためには、俗世のまじわりを断たねばならずとは、儂も存じてはおる。しかし世襲の役儀にかまけてそれと知りつつも、泥水に手を汚さねばならぬことも多うござる。年長の儂が伊豫殿のお覚悟のほどをお聞きいたし、まことに恥ずかしいばかりでござるよ」
感にたえた面持ちの越後は、兵介が隈本城下を去ってのちの遍歴のあいだに、疋田栖雲斎、柳生五郎右衛門宗章とすごした日のことを詳しく聞く。
さらに、兵介が金沢へ富田流小太刀の技をためしにきたのは、巌流の遣い手としてかつて京洛の地に知られた、根岸矢柄との死闘で苦汁をなめたためであるとの告白を聞き、越後はおどろく。
「根岸矢柄なれば、儂も存じておる。あの者の杖ならば、なかなかの難物じゃ。その攻めをよく凌いで打ち伏せられたものよ。伊豫殿のお手のうちは、なみなみならぬものと思うてはいたが、やはり見込み通りのようじゃ」
越後は眼をなごませ、うなずきつついう。
「儂をはじめ富田流一門の者は、たしかに合戦のときにも小太刀を使うが、それは物具つけて、身動

きも思うままになりがたきときのこと。敵味方いりみだれての斬りあいとなれば、長物より短兵が使いやすきためじゃ。試合のときは、小太刀で長柄は扱いにくいものでござる」

富田越後は兵介との歓談をおえ、あらめ入りの雑炊で非時のかるい食事をすませたあと、城中へ出向いて主君利長にことの次第を報じた。

「なるほど、伊豫は武辺いちずの男か。それならばねんごろにもてなして、帰してやらねばなるまいが、こののちも気をゆるしてつけこまれてはならぬぞ」

利長にいわれ、越後は言葉に力をこめた。

「仰せのごとく、ぬかりはござりませぬ。されば明朝にも、たがいの手のうちをたしかめとうござりまするゆえ、お許しをいただきとう存じまする」

「他流試合をいたす所存か」

利長は表情をあらためた。

他流試合は真剣、木太刀でおこなわれ、たがいの打突はもちろん手加減なくおこなわれ、身体の危険は避けられない。

試合の結果、死傷した敗者は武士としての面目をも失うところから、敵をにくみ憤りを発し、乱心をもって勝負をあらそい、遺恨をあとにのこすこととなる。

このため諸大名家では他流試合を禁じているところが多かった。利長としても、天下に武勇のほまれのきこえた越後を、無疵で手許に置きたい。

万一にも、柳生伊豫のような若年の遣い手に遅れをとらせたくないのである。

「試合をいたすまでのことはござりませぬ。たがいに打太刀と使太刀にわかれ、技を使うてみれば、腕前のほどはしかとわかってござりましょう」

越後はまず自らが小太刀をとり、兵介に定寸の木太刀で打ちこませてみるつもりでいた。
富田流のひととおりの小太刀の技を披露したのち、越後が打太刀の役にかわり、兵介に打ちこんでみて、新陰流小太刀の内容を見てとる。
たがいの太刀さばきを見せあうだけで長所を採ることができ、しかも傷つくことがない。
「さようか、そのほうと柳生伊豫の双方のためになることであれば、太刀を使うてみるがよい。その際、儂が戸の間からなりとも見たきものじゃ」
越後は平伏して答えた。
「御意のままになされませ」
「そのほうの屋敷へ、いつ参ればよいか」
「明朝、巳の下刻（午前十時から十一時）に渡らせませ」
利長が微行で富田屋敷へくる刻限をうちあわせたのち、越後は御前を退出した。
彼は主君にわが技前を見られて、臆する気持はなかった。あるがままの姿を披露すればよい。たとえ、兵介に打ちこまれたとて、わがつたなきを知れば、そのまま新陰流の秘伝を伝授されることになるのである。
ひそやかな地虫の声が耳につく、風のおちた宵、兵介は富田屋敷客殿の濡れ縁に坐り、小猿、千世をかたわらに侍らせ、諸白の上酒を味わっていた。
膝前を雪洞が照らしている。庭前の燈籠にはすべて灯がはいって、桜の老樹からたえまなく舞いおちるはなびらを、闇のなかにうきあがらせていた。
「祖父さま、父上、母上は息災でおられるかのう」
兵介は、肌にここちよくうるおった夜気を呼吸するうち、のどかな小柳生の夜景をまなうらにえが

いていた。
「日頃よりご壮健におすごしゆえ、なんのお障りもなく、日暮らしをなされておられることでございましょう。若さまのご帰館の日を、おうなじをさしのべてお待ちであろうと存じまする」
千世は、兵介の横顔におさなげな憂いのかげを見いだし、いとしさに動悸をたかめた。
彼女は兵介が逞しい偉丈夫で、天下に知られた剣の達者であるのに、なぜかわが腹をいためた子供のように、いとしく思えてしかたのないときがあった。
あぐらを組んだ兵介の、小袖の前身頃が乱れてもいないのに、彼女は手をのばしととのえてやる。
「儂はのう、明朝巳の下刻に、屋敷の奥庭で越後殿と小太刀の技を使う際、祖父さまより教わった截相口伝にのみ従わぬぞ。この日頃おのれが工夫した太刀をも生かしてみようと、思うておる」
小猿が膝を打って応じた。
「そうなされませ。上泉伊勢守さま、ご隠居さまより相伝なされた数々の太刀は、もとより大切でございましょうが、若さまが骨身を削らはっての鍛練ののちにきわめなはった、微妙の妙道にも、真の値打ちをあらわしてやらねばいけまへん」
「うむ、儂の工夫はふたつあるのや」
兵介は片頬に笑みのかげをみせた。
彼の工夫のひとつは、三学円の太刀のうち一刀両段の太刀の使いようであった。
上泉以来の一刀両段の太刀は、敵が八相から斬りこんでくるのを、位を低く腰をおとし、車（脇構え）にとって太刀をふりあげ、右肩から袈裟に斬る。
兵介はそれまでの腰をおとした低い位をやめ、直立ちし位をとろうと考えた。そうすれば打ちこむ歩幅がひろがり、速度がはやまることを、疋田栖雲斎のクネリ打ちから学んだためである。

また、彼はそれまで日本国の兵法者の誰ひとりとして使ったことのない、上段の構えを考えだしていた。刀を頭上たかく捧げ持つのである。

当時の上段の構えは、甲の邪魔にならないよう、切先が胸よりうえにくるほどの高さであった。

昧爽の冷気が身に沁みる寅の下刻（午前四時から五時）、千世は床の間の土圭にあわせ、兵介をおこした。

熟睡から醒めた兵介は、井戸端で髪をといたのち、先祖の位牌にむかい心経普門品を誦し、心を澄みわたらせた。

彼は定寸の木太刀を手に、一尺三寸の小太刀を腰に差して、ほのかに物のかたちをあらわしはじめた庭に出る。

「爾が一念の疑い、すなわち魔、心に入る。菩薩の疑う時のごときは生死の魔、便を得。ただよく念をやめよ。さらに外に求めることなかれ」

柳生館で、鳥飼い間切りの稽古をつんだ日々、口癖のようにとなえた臨済の禅語を、兵介はつぶやく。

修行者の心に一念の疑いがおこるのは、魔の誘いである。菩薩でさえ疑いにとらわれたときは、生死の魔につけいられる。ただひたすらに思念をやめ、外にむかい何も求めるなという教示は、そのまま剣の妙諦に通じていた。

兵介はあしうらに感じる黒土のつめたさに気をひきしめ、幾度か八双、車（脇構え）からの打ちこみをこころみる。

彼の動きは、迅業というにはあたらない。水の流れるように虚心な足どりでふみこみ、ゆっくりと打つのであるが、剣尖には磐石をうち割る重い力がこもっている。

縁先にたたずむ小猿が、思わず口走る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com